

メールレター（76）

夏の終わりなのかしら

気がつけば八朔の月。時々の猛暑をのぞけば湿気の強い雨の日が五月から続き、ここ数日はすでに秋の気配です。夜は12－13度まで気温がさがることもあり、寒いほどです。山火事がおさまったのか煙のсмоッグが消え、やや息がしやすくなりました。

マダム田中は7月に一つ年をとり、ドリトル先生は8月半ばに一つ年をとります。二人とも晩年を指を折って数える年になりました。

「今日も無事に過ぎたね。」

夕方になるとそうつぶやいていた、昔の母の言葉が良くわかる年になりました。無事な一日の幸せがわかるのに一生かかり、しかもこんな遠くの国まで旅をしてしまったようです。

ある曇り空の日のこと、近所の韓国料理店でラーメンの軽いランチをしていると、突然入ってきた短パンの若者が、カウンターで袋を受け取ると、抱えていた電気キックボードを歩道に置き、スイッチを入れて走りだし、姿を消しました。デリバリー屋のようです。この包みをどこかに届けるのでしょうか。コロナ禍以来、食事のデリバリーの傾向はうなぎ上りです。タクシーのウーバーイートはもう遅い。人波や車で溢れる街中は、こうしてキックボードでデリバリーなのだと思われ、目から鱗のランチタイムでした。次に入ってきた若者は、スマホを出して注文をしておいた物を受け取ると、歩道で小脇に抱えていた塊をボキッ、ボキッと三度ほど折り広げ、数秒で超高級品のメタルの自転車を組み立ててランチの袋を前にぶら下げ、すいすいと走りだしていきました。

「格好いい。」

折りたたみ自転車できりげなくオフィスに戻るエコ志向の若者のランチピックアップは、もう一つ、目から鱗でした。レストランの窓辺の数分の光景に思わず微笑んでしまいました。

モントリオールの気候は定まりません。日本館の日本庭園の手入れを長年していたルイの定年退職のお別れ会があったのは、雷が鳴り響き、眼下の港にバリバリと数秒ごとに鋭い光を出し

て雷が落ち、町中が土砂降りの黒いカーテンに覆われた日のことでした。彼とは30年以上のお付き合いだったような気がします。日本庭園に行けば、ニコニコしている律儀な彼がいました。

「勝手に木は切るな」

と、30年前に鋏を持って庭園をうろついていたマダム田中を怒鳴ったのは彼でした。

「1本だけだから。」

「僕には1本でなく、庭全体の調和だ。」

それ以来の仲良しで、何か必要な時は彼に切っておいてもらうことがしばしばありました。

元プロフルート奏者だった彼がどうして庭師になったのか、お別れ会の帰りの車の中で、彼はしみじみと語るのです。

「運命って決まっているような気がする。特に自分で選ぶのではなく、天の星が手の中に落ちてくるように、ふと落ちてくる。」

庭師のきっかけは、プロのミュージシャンには10年たってもなり切れず、もともと好きだった蘭栽培のパリ研修に応募し、パリで三か月の研修を受け、カナダに帰国後モントリオール植物園で働き始めたことだそうです。そのころ丁度、日本館と日本庭園の建設が始まり、担当の庭師の養成を日本ですることになりました。庭師の仕事は素人だったのに、運よく合格し日本に向かうことになりました。修行は、言葉もわからず楽ではなかったようですが、充実した日々だったようです。

「日本は好きだった。研修が京都ということもあったけど、あの感性と美観が僕には夢のようだった。日本で何もかも探していたものを見つけたような気がする。」

こうして、美を保つ正当な北米第一の日本庭園をその後30年以上受け持つことになりました。今は、北米日本庭園協会の会長もしているようです。

「これからはどんな星？」

「わからない。星屑が落ちてくるかも。」

手の中に星はまた落ちてくるのでしょうか。

モントリオールでは、今、バービー映画フィーバーが収まりません。映画館がピンクに染まり、観客で溢れています。あの超八頭身のピンクのバービー人形のパロディの映画のようですが、テーマがかなりシビアで大人向けにできているようです。孫たちと見に行った友達に言わせると、

「ともかく面白い。笑っぱなしの映画。絶対お勧め」

こうしたバービー映画の熱狂の一方、ある友人は不安げに語るのです。

「ハリウッドはどうなるのかしら？」

ハリウッドはストライキ中なのです。シナリオライターも俳優もストライキ中です。

「娘が仕事がなくなってしまったわ。」

彼女の娘は、衣装係として多くのヒット映画の衣装を手掛けてきました。モントリオールには大きな映画スタジオがあり、アメリカ映画の多くがここで撮影されたり、街中でロケされたりしていました。我が家のあたりはロケのメッカでした。早朝に（5－6時）我が家の窓にくっついてクレーンの上でメガホンを持ってどなる監督の声に起こされたこともあります。ナチ軍の行進のロケで二股ぎの道を渡れず家に戻れなかったこともあります。こうしたロケはもう見られなくなるのかもしれない。

もう一人の友人は

「バンクーバーの息子のプロダクションに仕事が来ないのよね。ハリウッドの映画をずっと受けもっていたのに、このストライキで仕事が来ない。たとえストライキが終わったとしても、企画やシナリオから作品になるまでは1年も2年もかかるのよね。」

ストライキには色々の理由があるようですが、一番の理由はAI(Artificial Intelligence)の起用の拡大（いわば乗っ取り）にあるようです。AIを使えば、大半の仕事はインプットするだけで処理でき、シナリオも大半出来上がり、スタジオも小さい所で撮影するだけで、どんなものでも変幻自在に作りあげられ、大きなスタジオもロケもいらなくなります。それにかかわる人達もいなくなるのだそうです。映画会社にとっては経費削減になり、更なる利益の拡大につながります。AIと人間の戦いに入ったのかもしれない。

「映画なんてほんの埃のように小さい一部のよね。AIは社会にますます広がっていつていのよね。」

友人のため息は深くなるばかりです。小さな日々の幸せも AI も全て受け止めて暮らす晩年はやや身構えが要りそうです。